

■ 書 評



アンチスティグマの精神医学 —メンタルヘルスへの挑戦—

ノーマン・サルトリウス 著
日本若手精神科医の会 訳
金剛出版 2013年2月
280頁 定価 4,830円

ノーマン・サルトリウス氏の著書「Fighting for mental health」を日本若手精神科医の会のメンバーが翻訳した書である。冒頭にサルトリウス氏のコメントが記されているが、その中では、メンタルヘルスの急速な改革が求められている日本の現状を指摘し、若手医師がその翻訳を手掛けたことに対する称賛の辞が述べられている。

このノーマン・サルトリウス氏は WHO 世界保健機関のメンタルヘルス部門の部長および世界精神医学会会長を歴任された、世界の精神医療に最も影響を与えることのできる精神科医の 1 人である。

さて、この本の構成としては、第 1 部 メンタルヘルス総論、第 2 部 一般医学とメンタルヘルスの関係論、第 3 部 精神医学およびメンタルヘルスの実践論より構成されている。

第 1 部は、7つの章からなり、メンタルヘルス・プログラムにおける基本原則である「公平性」「連帯」「義務と権利の意識」などの重要性がわかっているにもかかわらず、実行できない現状にふれている。第 2 部では、プライマリケアでメンタルヘルスを取り扱うことの障壁と限界について、事例を交えて解説している。WHO での取り組みが遅々として進まないことに対して著者のもどかしさと怒りの感情が見え隠れしている。第 3 部では、精神医学そのものに焦点を当て、メンタルヘルス・プログラムを構築するに当たり基礎となる、メンタルヘルスのニーズを正しく評価することのむずかしさ、一次予防が可能であるにもかかわらず

ず、機能していない理由を挙げている。カトリック教でいう 7つの大罪、つまり、強欲、傲慢、嫉妬、大食、色欲、怠惰、憤怒になぞって精神医学の内面からの問題点をあぶり出している。そして、発展途上国での精神医学のあり方について著者なりの期待を込めて締めくくっている。

その記述は、非常に刺激的かつ攻撃的ではあるが、時には、この本の表紙絵を取り上げるなど、当意即妙な表現を巧みに取り入れて、読者を飽きさせないような著者の配慮がうかがわれる。批判の矛先は、社会、組織、プライマリケア医のみならず、精神科医にも公平に向けられている。終始一貫して批判するだけでなく、後進の我々にその解決策を示してくれている。

おそらくこれを読む者は私と同じ精神科医であろう。読み始めは、日ごろ我々が抱いていた思いをストレートに代弁してくれているため、小気味よく、我々を勇気づけてくれるが、読み進んでいくうちに、メンタルヘルスが好ましく展開していかない一因として精神科医自身に問題があることに気づかされる。このことは薄々わかっており避けていた問題だけに直面させられると、こちらにも複雑な心境となる。精神科医を志した時には誰しも、精神障害および医療に対しての他の医療スタッフを含めた周囲からの偏見に戸惑いと怒りを覚えた経験があるだろう。しかし、十数年が経過するうちにいつしか、諦めと妥協に変わっていくことが多い。この書は、我々精神科医を初心に立ち返らせ、これからの指針を与え、勇気を授けてくれるであろう。

(忽滑谷和孝)